

サイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing のプロセスに関する研究

軸丸清子

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

A study of Process of Psychotherapeutic nursing

Kiyoko jikumaru

Kochi University medical department faculty of nursing

〒783-8505 Okochyo, Kohasu, Nankoku-shi, Kochi ken

ABSTRACT

In this report, the process of psychotherapeutic nursing of a 5-year-old girl diagnosed with obsessive-compulsive neurosis and the psychological process of the girl is evaluated. She was examined at our Department of Neuropsychiatry and was diagnosed with obsessive-compulsive neurosis. Because of her young age, it was decided to treat her by psychotherapeutic nursing without drug therapy. Since it is difficult to develop language-mediated insight in small children, she began to take weekly sessions consisting of play, drawing, and sand play. At first, the world expressed in the sand box was markedly confused, and rocks were used frequently. However, as the therapeutic nursing continued and obsessive-compulsive symptoms were alleviated, the world expressed in the sand box was gradually stabilized, with the frequency of the use of rocks decreasing to complete elimination after about the 15th session. In addition, checking behavior almost disappeared. In and after the 19th session, she began to use symbols of happiness such as angels, Santa Claus, and white doves at an increasing frequency and to express a world that resembled a mandala. Nine months after the beginning of treatment (after 22 sessions), checking behavior disappeared, and the treatment was completed.

Through this psychotherapeutic nursing, the girl is considered to have regained stability of mind and re-established herself in a free and secure relationship with the nurse.

Key word : Psychiatric Nursing, counseling, Psychotherapeutic Nursing

キーワード : 精神 (心の) 看護、カウンセリング、サイコセラピューティックな看護、

緒言

現代は、都市化、情報化等社会が複雑になり、医学の高度化、生命科学の発展等人間の存在をめぐる倫理的な問題が浮上し、人々の精神（心）の健康問題が急増、深刻化している。それだけに精神保健医療福祉領域へのニーズも急増、多様化し、精神科医や臨床心理士だけでは対応できなくなり、医療機関においては看護師、ケースワーカー、作業療法士等もそれぞれの立場から患者の精神的な側面に深くかかわっているのが現状である。また地域においても、1987年以降の精神保健福祉法（精神保健及び精神障害者福祉に関する法律）の改正に伴う、精神障害者の地域生活を基本とした人権擁護の確立と社会復帰の促進施策により、医師・臨床心理士のみでなく保健師、福祉関係者、学校・産業保健関係者もサイコセラピスト的な役割を担って活動している。このように人々の心理的な側面へのニーズが高まっている現代社会において、住民の医療保健福祉に携わる様々な職種の人たちには、精神療法的（Psychotherapeutic）な素養ないし基本的な技能を身につけることが必要不可欠となってきている。現に、看護基礎教育においては、平成9年度から精神看護学が科目として独立し、看護師・保健師・助産師に精神療法的／Psychotherapeutic な看護が提供できる専門性の高い知識・技術・態度の教育が始まっている。ここでいう精神療法的な看護／Psychotherapeutic Nursing(上別府,2004)¹⁾とは、臨床心理学の知見を看護学の知識・技能と併用あるいは統合した心理的ケアないし、カウンセリングの知識と技術を専門的に学んだ看護師が、カウンセリング技法を用いて一定の時間及び期間、患者と向き合って対話を行う狭義の看護カウンセリング(広瀬,1999)²⁾のことを指す。

I. 研究目的

本研究では、筆者がカウンセリングと臨床心理学について学んだ後、週1回の臨床心理学教授のスーパービジョンを受けながら、神経・精神科の看護カウンセラーとして、ある強迫神経症の女兒にサイコセラピューティックにかかわり、精神（心）の健康を回復していったケースの経過を報告する。その中でも特にクライアントの内的世界のアセスメントとそれに則したアプローチ、スーパービジョンでの助言を振り返りながら、女兒の内的な成長プロセスを考察することで、今後のサイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing の発展に寄与することを目的とする。

II. 精神療法の素養及び技能と看護

筆者が『精神療法的な看護／Psychotherapeutic Nursing』という言葉をはじめて目にしたのは、牛島（2004）³⁾の「サイコセラピューティックな看護・序論」に続いて、上別府（2004）³⁾の「サイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing の展望」という論文である。その中で上別府は、サイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing について、チーム医療の重要性が増している現在の患者／家族の援助について、精神病理が重く対応の難しい患者や人格の変容を目標とする精神療法は専門家が行うべきであるが、それ以外の部分については、法に触れない範囲で精神療法について学んだ医療に携わる各職種が重なりを持って働くことが実践的であるとしている。その理由として、各職種のきっちりとした業務区分は患者／家族の看護ケアニーズに応じた援助の好機を逃してしまうと述べている。筆者も、10数年来の臨床看護の中で、精神（心

の) 看護やリエゾン精神看護のニーズが山積していることを経験してきた。そして、カウンセリングや臨床心理学の専門的な教育を受けた後、スーパービジョンを受けながら、病院や地域で看護の知識や技術と心理療法の知識や技術を統合し、看護カウンセラーとして人々の精神(心)の健康問題に携わってきた。今年で17年目に入り、このサイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing という概念が、今、最も実際的でピタリくる感じを受けている。

高度に発展した現代の医療現場では、最初に起こってくる健康問題が身体的なものであっても、症状に伴う心理的苦痛、治療、予後、医療従事者との人間関係等の問題、経済的な問題等、病むことによる様々な心理・社会的な問題が次々と溢れ出てくる。また、高度化した現代医療の中における患者は、インフォームドコンセントにはじまり、短時間で複雑高度な医療を理解し、これから受けようとする医療についての様々な判断と自己決定を迫られる。このように身体を病むということは、身体だけが病んでいるということはありません、身体と精神(心)が表裏一体の関係で、必ずサイコセラピューティックなケアのニーズが生じてくる。^{4) 5)} さらに地域における生活の場においても、社会の複雑化や高齢化に伴うサイコセラピューティックなかわりのニーズが高まっていることは、筆者への病院・地域臨床からのサイコセラピューティックなかわりの教育についての要請が、ここ数年来急増していることから明らかである。したがってこれからの看護においては、看護師・保健師・助産師がサイコセラピーについての素養ないし技能を持ち合わせているかどうか、医療保健の質や人々の健康回復を大きく左右するといっても過言ではない。

Ⅲ. 研究方法

1. 方法

子どもへの心理療法的なかわりと子どもの変容の過程を報告し、子どもの精神(心)の状態、母親の精神(心)の状態の影響を臨床心理学と看護学の見地から考察し、サイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing の成果と意味を明らかにする。

2. 倫理的配慮

本研究は、母親の許可を得て第14回日本人間性心理学会において発表したものである。発表に際しては、匿名や研究結果に影響しない部分を一部変更する等、個人が限定されないよう最大限の配慮をしたことはもちろんのことであるが、クライアントが子どもであることを考慮して、論文にすることは控えてきた。しかし、筆者がこのケースの臨床から遠く離れて数年がたったこと、ケース終結から10年以上を経過したことから、個人が限定がされることはないことを確信し、プライバシーの保護に一層の配慮をしながら、論文にする。そして、このケースからの知見を今後の臨床活動に活かすことで、クライアント及び家族に還元したい。

Ⅳ. ケースの概要

<クライアント>

来談時、Aちゃん(5歳)、母親(25歳)と妹(2.5歳)の3人暮らし。

<来談までの経緯>

両親が離婚し、妹と共に母親に引き取られて4ヵ月が経った頃、親戚の葬式の帰りに、伯母から「最近悪い男の人が居るから気をつけるように」と言われたことをきっかけに、次の日から口に入るものに関する確認行為が著しくなり、食事をあまり摂らなくなった。また、保育園に行くこと、外に出て友だちと遊ぶことも嫌がり、引きこもるようになった。

<生育歴>

母親の話によると、Aは両親の結婚10ヶ月後に健康に生まれた。父親は職業を転々と変わり、夜間の仕事につき、昼間は寝ていることが多かった。Aが2～3歳の頃、父親に休日に遊びをせがむと怒って殴りつけることが度々あったと言う。Aは幼少時からよく気がつく子で、特に出かける前や就寝前には、火の元や戸締りの確認をして回ったと言う。母親が仕事に出るようになり、2歳から保育所に預けられた。友達が多く、家によく連れてきて遊んでいた。

V. セッション及びクライアントの経過

平成X年6月からX+1年2月まで、週1回45分～60分、計22回のセッションを実施した。「」はA及び母親の、<>は看護カウンセラー（以降NCとする）の言葉、#はセッションの回数を示す。

平成X年6月小児科外来を受診し、小児科から神経・精神科を紹介されてきた。神経・精神科では強迫神経症と診断されたが、年齢が低いこともあり、治療は薬物療法をさけ、サイコセラピューティックなアプローチで経過を観ていくことになった。次の週から週1回の受診とともに、セッションを開始し、毎回スーパービジョンを受けながらサイコセラピューティックな看護/ Psychotherapeutic Nursing をすすめた。

第I期（X年6月～7月）：万能感の実感と安全・安心及び信頼の樹立

#1：母親、妹と共に来院し、NCが挨拶をすると母親のスカートで顔を隠し、周囲の様子をチラチラと伺っている。視線が合わない。面接室に案内するまでの間も母親のバッグの紐にしがみついている。面接室にはA、妹、母親、NCの4人で入り、NCが母親からこれまでの状況を聞いている間、Aと妹は部屋の隅に置いてある箱庭でミニチュアを並べて並行遊びや買い物ごっこをしていた。50分が過ぎて終了を告げると、Aは箱庭の中に置いてあったミニチュアを柵に片付けた後、それと入れ替えに尖った岩石を投げ入れた。

アセスメント：Aは自分を取り巻く世界に恐怖にも似た不安を感じているように思えた。また、それは面接で、すぐに涙が出る母親の情緒的不安定さと関係しているように思えた。

#2：Aは、片方の手で母親のバッグの紐を持ち、もう片方の手にはち切れんばかりに膨れたスーパーのビニール袋を3つ持っており、部屋に入るとその袋の中から切り絵を次々と取り出し、NCにプレゼントした。そして、それを面接室の壁に貼るよう要求し、一緒に貼り付けた。その後妹と一緒に箱庭で遊んだが途中で手を洗い、洗い終わると何度も手の臭いを嗅ぐ確認行為が観られた。箱庭は混乱しており、最後に岩石を投げ入れた。

アセスメント：不安は続いているが、NCに切り絵をプレゼントしたり、部屋に貼るよう要求したり、受け入れられる体験を通して信頼関係を樹立しようとしていると思われた。

#3：母親へのしがみつきは観られない。今回も大きなビニール袋を2つ持参し、切り絵をNCにプレゼントした後、母親とNCを巻き込んで買い物ごっこを始めた。Aは店主

になり、商品に見立てた石やミニチュアの家を紙に包んで NC に渡した。その後妹と一緒に箱庭で遊ぶが、ミニチュアを投げ入れるなど乱暴で、箱庭の世界も乱れている。セッションが終了し、廊下に出ると母親にしがみつき、急に疎通性がなくなる。

アセスメント：乱れた箱庭の世界は、A の内的世界の混乱であると思われ、『包む』というテーマは、『保護する』すなわち『保護されたい』という願望（欲求）と理解された。

4：ビニール袋を1つ持っており、中身については話さない。妹と二人で、箱庭で遊んでいるが、「んん！すぐ倒れてしまう！」とイライラしている。その後 NC を誘って、妹も加わり買い物ごっこが始まった。母親は誘わない。商品に見立てたミニチュアを紙に包んで NC に渡す。セッション中に数回手を洗い、手を臭う確認行為が観られる。終了の時間を告げると、前回までは「もう少し」と引き延ばしていたが、「サア！帰ろう！」と自ら区切りをつけた。視線が合う回数も増えた。

アセスメント：無秩序な箱庭や衝動的な態度等内的な混乱は続いているが、「直ぐ倒れてしまう！」等、感情や気持ちを表出できる安全感が少し生まれつつあるように思えた。

スーパービジョン：箱庭の混乱は、妹や母親が同室する影響と考えられる。次回から A のみの単独セッションにし、母親とは終了後に 15 分程度の面接をするよう指導を受ける。

第Ⅱ期（X年7月～8月）：内的混乱の修復とエネルギーの補給

5：ビニール袋は持っていない。今回から A のみの個人セッション。箱庭で池を造り、箱の左下の隅を石と木の柵で囲い、中には3匹の魚が寝ていると言いう。更に「お魚の隠れる所」と石を7個並べ、「お家」と言う建物の上には2本の太鼓橋が掛かっており、橋の上を「魚が歩いている」と言う。その後、ワニを手に取りよう NC に指示し、「戦いしよう！」と A が持っているラドンで NC が持っているワニの口に噛みついた。次にイルカを持つよう指示し、同じく口に噛みつき離さない。3分程こうして遊んだ後、床にガソリンスタンドを置き、その横に家と教会、その向かい側にはバス停の標識とバスを置いた。バス停の横には駅、その横に蒸気機関車を置いた。さらにガソリンスタンドの前に信号と道路標識、木材を積んだトレーラーを置いた。ひと通り並べた後、家の左前に『駐車禁止』、右前に『工事中』の標識を置き、「家の中をきれいに治してる。入ったら駄目」と言う。

アセスメント：ビニールの袋とプレゼントがなくなり、NC との信頼感ないしは安全感は獲得できたと思われる。視線が合い、自然な疎通性が感じられるようになった。

スーパービジョン：柵や石での囲いは保護を意味し、母親と A と妹の3人が、柵に護られてひっそりと身を寄せているイメージと重なる。前回までの箱庭に比べると纏まりがあり、秩序が観られる。ただし、「魚が橋の上を歩く」というのは不思議なことで、何処から水で何処から陸なのか不明瞭、まだある程度の内的混乱が続いているように思われる。ワニとイルカの戦いで特に口を攻撃するのは、口唇期的（精神分析の考え方）な葛藤を思わせる。「工事中の家」は、A の内的な世界の修復作業のように思われる。ガソリンスタンドや木材は、エネルギーの象徴であり、信号や道路標識は秩序づける象徴であり、心的なエネルギーの補給とともに無秩序な世界をなんとか秩序づけようとしているように思われる。A のみの単独のセッションになったことと関係しており、継続するよう指導を受ける。

6：箱庭にガソリンスタンド、ポリボックス、コンビニエンスストアを並べ、前回も使用したタンクローリーとトレーラーを持って来て、「ガソリン入れるの、満タン」と、

しっかりと給油した。その後Aの家を絵に描き、1階は「水道」、2階は「お勉強する机」、3階は「寝る所」と説明し、誰かが寝ているという。

アセスメント：水道もガソリンと同様にエネルギーを補給する所と解釈でき、Aの心的エネルギーの回復過程であると思われた。

#7：ノックもせずに突然面接室に入ってきて、箱庭の砂を底から大きく掻き混ぜている。少しイライラした感じを受けた。母親と妹が部屋から出て行くと、岩石の入っている箱を引きずり出し、その回りを椅子で囲んで、その中に入った。Aが売り子でNCが客だと言い、買い物ごっこが始まった。商品に見立てた岩石を丁寧に紙に包んでNCに手渡す。

アセスメント：毎回岩石を用いるのが特徴的である。岩石のように尖った重たいAの気持ちを『包む』、すなわち『包んで欲しい』という願望を自ら充足しているように思われた。

#8：箱庭の砂が少なくなったので追加の砂を準備してあった。その砂を「私が入れる」と空き缶で丁寧に箱庭に移し、一部を「米」と「砂糖」に見立て、2つの空き缶に満杯に入れて、水と一緒にNCの机の上に置いた。そのまま買い物ごっこに移行したが、前回までのような商品を紙で包む行為は観られない。

アセスメント：「米」、「砂糖」、「水」などは、生命のエネルギー源であり、心的エネルギーの補給の象徴と理解される。『包む』ことがなくなったのは、心的エネルギーの充足とも関係していると思われた。

#9：箱庭に水を入れて砂を湿らせ、箱の半分の領域に台形の山を3つ造り、それぞれ鳥居や社を置いた。残りの半分の領域は柵で区切り、「工事中なん」と手で砂を掻き混ぜ、整えた上に家を置き、シーソーやブランコ、椅子などを置いて公園も造った。

アセスメント：半分の領域は神的な世界であり、残りの半分は現実の世界であるが、現実の世界には公園が置かれ、子どもの世界を取り戻しつつあるように思われた。

スーパービジョン：Aの「工事中なん」は、家庭が工事中（修復中）であることを示し、宗教的な象徴を用いて葛藤を昇華させようとする試みのように理解されると指導を受ける。

第Ⅲ期（X年8月～10月）：傷ついAの内的世界の癒しとエネルギーの蓄え

#10：入室するなり岩石を入れてある箱を柵から引きずり出し、足元において砂を掻き混ぜ始めた。表面を整えて中央に線を引き、「先生こっちに海を作り！私こっちに水族館を作るから」と珊瑚・花・樹木・鮫・蟹・貝・小さい魚等のミニチュアをNCに手渡され、Aに相談しながら海の世界を作った。Aが造った水族館の側には、貝・ビー玉・オットセイ・エンゼルフィッシュ・イルカを置いた。海の世界の「鮫」と水族館の「イルカ」は対照的である。途中で子ワニをくわえた親ワニを手に取り、「可哀そうやなあ、（子ワニを）噛んでる」と言う。NCが「動物は手がないから口でくわえてあちこち行くんと違うんかなあ。だっこされるのと同じことと違うんかなあ」と言うと、「でも、血が出てるからやっぱり噛んでる」と言う。＜どうしてやろねえ＞と聞くと、「お母さん、子どものこと嫌いなんと違う？可哀相だからこっちへ置いておこう」とNCの机の上に置いた。

（母親との話）母親は1週間前から不眠、食欲不振が続き、4kg/W体重減少したと云う。Aの主治医に連絡し、抗うつ剤と精神安定剤が処方された。

アセスメント：Aには親ワニが子ワニを噛んでいると見えたり、親ワニは子ワニを嫌いなのではないかと感じたり、Aの内的世界が投影されていると理解された。そのワニをN

Cの机の上に置くことは、Aがセッションに通いケアを受ける事とイメージが重なった。

#11: 「川をつくるから先生も手伝って」と、濡れた砂を全部片方にかき集め、一つの大きな山を造った。むき出しになった箱底の青色の部分は川だと言い、「蟹は石の下にかくれてるんよな」と蟹を石で隠し、さらに金魚2匹を石で囲い、「ここ通れるの」と、石と石の間が通り抜けられることを確認した。次いで鯉とゴリ（魚）も同じ様に通り抜けられることを確認して石で囲った。これら海の魚と川の魚を注意深く分けて選んだ。

アセスメント: 『囲う』、『通り抜けられる』ということは、自分の世界を護りながらも外界との疎通性を保つというAの内的世界のイメージに解された。また、海と川の魚を分ける等、内的世界の秩序づけと解され、健全な自我の再建プロセスのように思われた。

#13: Aは「ママ、ここに居て」、「どっか行くの?」、「ほんまに、どっこもいかへん?」と、片方の手で母親の手首を握り、もう片方の手で母親の衣服にしがみついている。母親と別れた後元気がなく、熊手で箱庭の砂を軽く撫でていたが、やがて買い物ごっこのセッティングを始め、何度もやり直す。NCが菓子とケーキを注文すると、ケーキに見立たミニチュアをペアで揃うように一生懸命探している。帰りは母親の先頭に立って、元気に廊下を走り去った。

(母親との話) その後神経・精神科は受診していない。3時間位しか眠れないと、目の下にクマができています。抑うつ状態が続いていると思われた。

アセスメント: 分離不安が強い。母親の抑うつ状態と関係しているように思われた。しかし、セッションでの安定したNCとの関係を通して安心感を取り戻したものと思われる。

#14: Aが先頭に立って面接室に入る。先週の家族旅行の話をして、「動物園って何?」と尋ねた。説明をすると、しま馬や象など次々と動物のミニチュアを手にとり、ペアで箱庭の砂の上に置いた。NCと一緒に池を作ることと要求し、池の中にビーバーに見立たオットセイを置いた。ペアで並べた動物は池の方向に向け、更に池の淵に檻を、その前に柵を置いた。「この下からは入れるん」と、檻の前においた柵の下をビーバーが通れることを確認している。最後は砂を均して終わった。

アセスメント: Aは今まで動物園に連れていってもらったことが無たっかようである。離婚前の家庭の様子がかえり。『囲う』、『通り抜けられる』は、#11の『通り抜けられる』と、同じであり、自我の再建プロセスのように思われる。

#15: 床にミニチュアのガソリンスタンドを置き、中には乗用車やトレーラーを並べ、長時間かけて給油している。給油が終わると乗用車やトレーラーをガソリンスタンドの外に出し、道路標識と建物を次々と追加し、「Aのお家、まだ出来上がってない」と家を柵で囲って、工事中の標識を前に置いた。更に飛行機3機と船8隻をAの家の後に置き、「嵐が来た」と船に砂をかけ、船が砂に埋もれて見えなくなると、「もうお家出来た(工事が済んだ)からこれ取る」と、柵と工事中の道路標識を取り除いた。次に赤い自転車を持って来て、「これ、パンクしてるから治す」とタイヤに絆創膏を貼り、教会の横においた。

アセスメント: Aの心理的エネルギーの補給と内的世界の秩序づくり、家庭の修復、A自身の傷ついた心の癒し等のイメージで捉えられた。

第IV期 (X年11月~12月): A自身のコントロール感の獲得と自我の再建への取り組み

#16: 画用紙に豹の絵を描いた。口を開けていると言うが、赤く大きな口が印象的であ

る。「カメレオンが毒蛙をやっつけた」、「やったね、カメレオンくん、蛙、毒蛙」と豹の絵の下にカメレオンが長い舌で毒蛙を捕獲している絵を描いた。その後箱庭に移り、砂の上に白い十字架を4つ、少し大きめの茶色い十字架を1つ置いた。NCに「この下に何かがあるか?」と聞きながら、十字架の下を掘り起こした。左端の白い十字架から順に看護師、机で勉強している学生、担架に乗った怪我人、白雪姫、大き目で茶色の十字架からは赤ちゃんを抱いた母親が出てきた。〈Aちゃんはこの中のどれが一番すき?〉と聞くと、白雪姫を差し出した。その後、ミニチュアを自主的に片付け、チャイムが鳴ると自ら退室した。(母親との話) 3日程前から眠れず、夕べは一睡もしていない。頭が痛くて車の運転をしても、目が霞むと言う。神経・精神科の外来受診を勧めるが受け入れない。自動車を置いて帰ろう奨めたが運転して帰った。帰り際にAがNCに別れの握手を何度もせがむと、母親が叱りつけた。

アセスメント：母親の抑うつ状態は治療を要する水準にあると思われるが、受け入れていない。Aの箱庭の「死」のテーマや会話の中の「毒蛙」、「別れを惜しむ」等は、母親のそのような危機的な状況にAが何らかの危険を感じているのかも知れない。

スーパービジョン：スーパーバイザーに電話で相談をした。バイザーは箱庭の解釈について、「死」のテーマは象徴的(再生の前の「死」)に捕らえてもよいのではないか、別れを惜しんだのはセラピストに心配して欲しかったのではないか。念のため危機介入として、母親に危機的なときにはNCに電話(病院)をしてよいこと、NCに連絡がとれない場合には「いのちの電話」を利用すること、またその電話番号を伝えることと、指導を受ける。

#18：買い物ごっこの中で、これまでも時々登場した子どもをくわえた親子のワニを、商品に見立ててNCに渡した。そして「先生、カメレオンの絵本あった?毒蛙ののってるのもやで」と聞いた。前回のセッションで、「カメレオンと毒蛙ののっている絵本はないの?」と聞かれ、探してくる約束をしていたが、まだ見つかっていなかった。

アセスメント：子どもをくわえた親ワニをNCに渡すという行為は、傷ついたAがケアを受けるためにNCとのセッションに出かけてくるとイメージが重なった。

スーパービジョン：カメレオンはいろいろな色に変わることから、母親の情緒の不安定さを表しているように思われ、毒蛙もAにとって毒を感じさせるものとして何かあるのかも知れないというアドバイスを受ける。

#19回目：廊下で出会い、AがNCの手から面接室の鍵を取り、自分で鍵を開けて中に入った。母親と妹が入るのを拒み、内側から鍵をかた。この頃から面接室の鍵をAが操作するようになった。「Aなあ、昨日お家でクリスマスした」と話しながら、箱庭の砂をぬらして、丸いクリスマスケーキを作った。落ち着ついた態度で集中力がある。

(母親との話) 自宅の近くに夜間保育もある託児所ができ、時々そこに子どもを預けて外出をするようになったという。

アセスメント：Aが鍵を操作し、自分の意志で自分の世界をコントロールしようとしているように思えた。母親は自分の時間を持つことができ、精神的に安定してきたと思われる。後でわかったことであるが、この頃から年配の男性とつき合うようになっていた。

第V期(X+1年1月~2月)：自我の再建及び強化と統合へ

#20：妹と母親の背中を押して面接室から追い出し、Aが中から鍵をかけた。「Aは絵

を描くから先生はそれで遊んで」と、NC に箱庭で遊ぶよう指示をし、それにしたがった。砂を盛り上げ、その周囲に2重の溝を掘っていると「先生そこにサンタクロースを並べよう」と、サンタクロースや雪だるま、エンゼル等を置いた。

(母親との話) 最近、口に入る物の確認行為はなくなったと言う。セッション中の手洗い後の手を臭う確認行為は、15回目以降消失している。

アセスメント：自分の意志を明確に表現でき、自己決定しながら主体的に行動できており、自我の機能が十分に機能していると思われた。

スーパービジョン：前回から観られるケーキや今回の円は曼陀羅のイメージ。箱庭療法における曼陀羅は、Self (自己) の象徴、すなわち自我の象徴と捉えることができる。統合の段階にあると言えるのではないかと、指導を受ける。

#21：A が部屋の鍵をかけ、「先生ごっこ (遊び) しよう」と、レストランごっこを始めた。バイオリンを弾いているエンゼル、白い鳩、マンドリンを持っている少女、雪だるま、サンタクロース等を料理に見立て、四角い空き缶の蓋にきちんと並べて入れた。

アセスメント：エンゼルやサンタクロースは最近よく登場し、平和の象徴でもある。A の内的世界も、このような穏やかさ、平和を取り戻しつつあるように思えた。

スーパービジョン：A の内的世界も混乱がなくなり、このように穏やかで安定した状態が多くなっていると考えられ、終結に向かっていく。終結では、今後も何かあればいつでも相談に来てよいことを母親とAに伝える (分離不安の軽減)。一旦Aの問題は終結であるが、今後は母親の問題が課題として残ると、指導を受ける。

#22：「先生ごっこ (遊び) しよう」と先週のレストランごっこの続きをした。終了の時間になると、箱庭の砂を手できれいに均して、表面を2~3回両手でポンポンと軽く叩き、「お終いにしよう」と手を洗いに行った。以前の様に時間を引き延ばすこともなく、自らきちんと砂を整えて終わった。

アセスメント：自我が再建され、自分の世界を自分でコントロールできるようになったと思われる。しかし6歳とまだ幼少であること、母親の課題が残っていることを考えると、再びケアのニーズが生起する可能性がある。援助の手がかりを提供しておく必要がある。

VI. 考察

箱庭療法は、スイスのカルフ(Kalff,D.)に教えを受けた河合(1992)⁶⁾が、1965年に日本に紹介したことに始まるサイコセラピーの1つである。このケースにおける箱庭は、精神療法的な看護/ Psychotherapeutic nursing におけるコミュニケーションの媒体として捉え、解釈はAの内的世界の理解の参考とする。

Aは幼少時より火の元や戸締まりの確認をして回ったということから、本来安全基地であるべき母親との間で安心感が得られておらず、不安の高い子どもであったが⁷⁾、両親の離婚をきっかけにその不安が増大したものと思われる。それは、口に入る物への確認行為や#5のワニ・イルカとラドンの戦い、#10の口に子ワニを加えた親ワニが登場する等の口唇期 (乳児期)⁸⁾の葛藤と理解される症状等からも推測される。

このような状況にあるAにに対して、精神療法的な看護/ Psychotherapeutic nursing では、AがNCとの自由で安全な遊び⁹⁾を通して、安定したNCを母親への移行対象として取り入れ、心の安定を取り戻していったものと思われる¹⁰⁾。たま、遊びの中でNCがA

の要求（欲求）を受け入れることで、自己のコントロール感を獲得し¹¹⁾、自我を再建していったものと思われる。

第Ⅰ期は、万能感の実感と安全・安心及び信頼関係の樹立の過程であったと考えられる。当初は母親にしがみつき、非常に不安が高い状態にあったが、#2からはAが作った切り絵をNCにプレゼントし、それをNCが受け取る、またAの要求を受け入れて、それを壁に貼るなど、NCに『受け入れられる体験』を通して万能感を実感し、安全・安心感の持てる信頼関係を樹立して行く過程であったと考えられる。

第Ⅱ期は、傷ついた心の痛みを癒し、混乱を修復してエネルギーを補給していく過程であったと考えられる。ワニ・イルカとラドンの戦いは怒りなど社会的には受け入れられない感情の昇華、標識や工事は内的混乱の修復、ガソリンの給油、箱庭への砂の補給等は、A自身の心理的エネルギーを補給していく過程であったと考えられる¹²⁾。また、#1からの岩石を投げ入れるという行為は、#3からは岩石を包むという行為に変わり、#8からは観られなくなっている。Aは遊びの中でNCに受け入れられることが、『護られる』ないし『包まれる』という体験となり、NCを同一視して、遊びの中で重たい石（心）を『包む』という作業をくり返し、傷ついた心を自ら癒していったと考えられる。村田(1963)は¹³⁾、同一視は人間形成、社会化の基本条件として重要であり、子どもはこれを通じて人格形成及び行動や態度を発達させていくと述べている。

第Ⅲ期は、Ⅱ期からの心的エネルギーの蓄え、内的世界の秩序づけ、傷ついた心の癒しの過程であったと考えられる。それは、ガソリンの給油や標識の使用、家の工事、子どもをくわえた親ワニと子ワニをケアするなど象徴されていると言える¹⁴⁾。特に心的エネルギーの蓄えは、全ての砂を盛り上げて造った大きな山に観ることができる¹⁵⁾。

第Ⅳ期は、A自身のコントロール感の獲得と自我の再建への取り組みの過程であったと考えられる。#16から自主的に箱庭の砂を均して片づけたり、終了時間をA自身が管理したり、#19からはAが面接室の鍵を操作したりと、遊びの世界を通して現実世界におけるコントロール感を獲得し、自我が再建されていったと考えられる。新井(2002)¹⁶⁾は、子どもが自分の身体をコントロールする事と重要他者とのしっかりとした愛着をつくることは自発性を促進し、自己実現の側面の拡大を強めると述べている。

第Ⅴ期は、自我の再建及び強化と統合への過程であったと考えられる。#20からはサンタクロースや雪だるま、鳩やエンゼルなど聖なる物の象徴やケーキ、円など曼陀羅のイメージがくり返し表現されている。箱庭療法の過程では、クライアントの自我が再建され、強化されていく過程において、自我の発展の母体として全体性自画像（曼陀羅）が表現されると言われている¹⁷⁾。

おわりに

本ケースは、看護学の解剖・生理や疾病・治療の理解、症状コントロールの知識や技術と臨床心理学のカウンセリング、遊戯療法、箱庭療法、家族療法、精神分析、発達心理学等の知識や技術を統合したサイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic nursing であると言える。複雑・高度化し、精神保健医療福祉への期待が高まっている現代社会においては、人々の多様なケアのニーズに柔軟かつ専門的に応えられるように、サイコセラピーの訓練を本格的に受けた看護師や保健師・助産師の養成が急がれる。

引用・参考文献

- 1) 上別府圭子(2004) サイコセラピューティックな看護／Psychotherapeutic Nursing. 精神療法 30(6) : 85-92.
- 2) 広瀬寛子(1994) 看護カウンセリング. 第1版 医学書院 東京
- 3) 牛島定信(2004) サイコセラピューティックな看護・序論. 精神療法 30(6) : 83-84.
- 4) Schwing G(1940) Ein Weg zur Seele des Geisteskranken. Rascher Verlag, Zurich. (小川信夫, 船渡川佐和子訳(1966) 精神病者の魂への道. みすず書房 東京)
- 5) 飯田澄美子・見藤隆子編著(1997) 看護カウンセリング. 医歯薬出版 東京
- 6) 河合隼雄・山中康裕(1992) 箱庭療法研究 1. 誠信書房 第4版 東京
- 7) 新井邦二郎(2002) 図でわかる発達心理学. 福村出版 東京
- 8) 氏原寛・小川捷之・東山紘久(1992) 心理臨床大事典. 培風館 東京
- 9) 麻生武・綿卷徹 編(1998) 遊びという謎. ミネルヴァ書房 京都
- 10) D・W・Winnicott(1971) Playing and Reality Tavistock Publication Ltd, London.
(橋本雅雄訳(2000) 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社 東京)
- 11) 前掲 6)
- 12) 村田孝治 (1986) 児童心理学. 朝倉書店 東京
- 13) 河合隼雄・山中康裕(1988) 箱庭療法研究 3. 誠信書房 第2版 東京
- 14) Milton Mayeroff(1971) ON CARING. Harper&Row, Publishers, Inc., New York(田村真・向野宣之 (2001) ケアの本質. ゆるみ出版 東京)
- 15) 前掲 6)
- 16) 前掲 6)
- 17) 河合隼雄編(1969) 箱庭療法入門. 誠信書房 東京